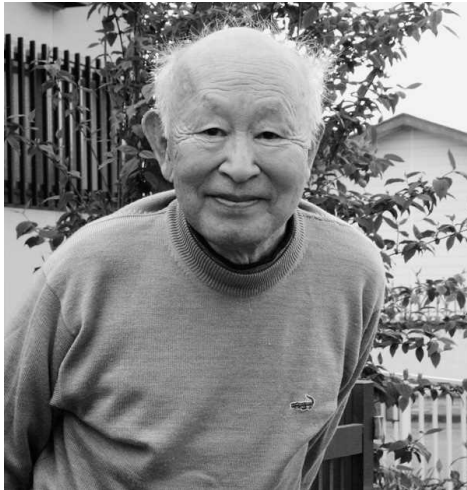


[追悼]

追悼 友田淑郎氏

小寺春人*



友田淑郎氏 2013年

化石研究会の会長を1979年から1983年まで歴任されていた友田淑郎氏は、去る2017年11月26日に心不全のため逝去されました。享年95歳でした。国立科学博物館の動物研究部で主に現生ならびに化石魚類を研究されていた友田氏は、一言で言って変人の学者でした。いわゆる常識をもつ人ではありませんでした。しかし、そこには天性の鋭い感性と強靱な否定的精神を持ち合わせた研究者で、それが数々のユニークな研究の源泉となっていたのだと思います。

友田氏は1947年に大阪大学理学部物理学科を卒業されたのですが、その後結核を患われて長期の療養生活を余儀なくされたことを契機に、幼少のころから親しんでこられた動物学へと方向転換されたのでした。京都大学理学部動物学科の大学院に進まれ、そこでは著名な宮地伝三郎氏と徳田御稔氏の助言のもと、種の起源をテーマに琵琶湖のフナの発育を研究されました。その研究法は、水槽の中で発育を観察されたばかりか、琵琶湖のヨシ帯の水中で展開するフナの発育過程を追跡されたのでした。ヨシ帯は刻々と劇的な環境変化がおこりますが、フナはこの変化にみごとに適合して発育するのです。この環境側の変化に適合しな

かった個体群は淘汰されてしまいます。自然淘汰は個体ではなく主として個体群に作用する姿を自然の中で直接に観察されたのでした。また2種のフナであるゲンゴロウフナとニゴロフナの間では、自然状態で交雑が生じており、種の分化は隔離により生じるのではなく、交雑しながら分化することを主張されたのです。ゲンゴロウフナは、その祖先の環境だったと思われる浅瀬のヨシ帯に育ち、やがて大雨によって沖合へと拡散します。短絡的にいえば、フナは発育に伴って祖先的環境から新しく適応進化した環境へ移動することによって、系統発生の過程を形態の変化ばかりでなく、その環境条件をも反復することによっても発育が進行することを示唆されています。

琵琶湖ではフナの研究の一方で、琵琶湖の固有種である2種のナマズの研究も手がけられ、ピワコオオナマズとイワトコナマズの新種記載をされたことはよく知られています。

国立科学博物館に移られてからは、日本の淡水魚類相の起源を明らかにするために、化石の証拠を求めて日本各地へ発掘調査に出かけられました。とくに壱岐島では、珪藻土層からの格別保存のよいコイ科魚類の化石に注目し、地質の研究と合わせた団体研究を組織されました。化石から明らかになったことは、中新世の魚類相は今日の魚類相とは大きく異なり、今日の中国大陸の魚類相に近似していたことが判明したのです。また琵琶湖でも、湖の周囲に分布する古琵琶湖層から産出する種々の化石について研究され、化石からみた琵琶湖の生物相の変遷と、固有種の起源の一端を明らかにされました。

その他にも世界のいくつかの古代湖、バイカル湖やラナオ湖（フィリッピン）、セヴァン湖（アルメニア）、古い型のコイが生息する杞麓湖をはじめとする雲南省の高原湖群の調査に出かけられました。そして晩年にはタイのメコン川に生息する巨大なコイ科の魚である *Aaptosyax grypus* の研究をされ、この魚にコイ科の原始形質が保持されていることを明らかにされています。さらに、筆者との共著では、中新世から発見されたアユの化石を *Ichthyological Research* 誌に報

* 〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学歯学部解剖学教室
E-mail: kodera-h@tsurumi-u.ac.jp

告し、魚類学会の論文賞を受けています。アユの化石は体長が5 cmほどの小さい個体で、島根大学にワカサギと同定されて保管されていたものを、友田氏が一目見て直感的にアユだと見抜かれたのでした。

科学博物館を定年退職されたあとのエピソードでは、ウナギの完全養殖を手がけられたことがあります。まずウナギの成魚を飼育し、これから採卵して、さらにレプトケファルス幼生の餌付けを計画されたのでした。これは机上の計画にとどまらず、私財を投入されて巨大な海水の水槽に成魚のウナギを飼育され、また、幼生の餌のためには数メートルの高さのある円筒の水槽を設置されたのでした。しかし実験の途中から体調を悪くされ、この計画はあえなく頓挫したのでした。中止になったことに誰よりも安堵されたのが奥様であることは言うまでもありません。この構想の根幹となった発想は、レプトケファルス幼生がマリンスノーを食べているとの信念に駆られたからでした。筆者の記憶では、友田氏のこの発想は1970年代だったと思います。今日、マリンスノー説が有力とされていますが、友田氏がマリンスノー説を古くから唱えていたことを述べておきたいと思います。

世間では人に迷惑をかけるような生き方はするなと言いますが、友田氏はまさしく人に迷惑をかけ続けた、まことに困った人であったと言っても過言ではありません。一方的にご自分の話題だけを長時間話し続け、ご自分の都合のみを考えている人でした。しかし、友田氏は金銭欲とも名誉欲とも、あまりに無縁な人でした。いつもご自分が発見した諸々の事象や正しいと信じる学説を、情熱的に際限なく説かれるのでした。数々の迷惑をこうむった人も、その純粹無垢な熱

い精神に、強い衝撃と魅力を受けてきたのだと思います。

最後に、友田氏が最晩年に結果的に残されたと言うべき、栄養学にまつわるエピソードをご紹介します。奥様が十数年前に亡くなられたあと、友田氏は一人暮らしをされていましたが、5年ほど前に心筋梗塞で倒れられ、ステント治療を受けられました。その後は短時間の介護も受けながらも、やはり基本的にはお一人での自由な生活を送られたのでした。しかしその間の食事は、たとえば朝は菓子パンにカルピスと牛乳を割った飲み物を、昼にはコンビニの数個の握り寿司を、夕方はお菓子とカルピス牛乳のみ、という驚くべき偏食を続けられたのでした。ヘルパーさんや看護師の専門職の方から、あまりに偏った食事と水分摂取の不足を懸念されてきたのですが、友田氏は頑として好きなものだけを食べ続けられ、95歳の長寿をまっとうされたのでした。この事例は、むしろ栄養学に反省をせまるものではないかと思います。先にも述べましたように、友田氏は若いときに結核を患われて片方の肺切除術を受けられており、いつも不調を訴えられていましたし、氏ご自身も短命だと思っておられました。その点でも虚弱体質は短命だとの常識を破られたわけで、貴重な教訓を残されたのではないのでしょうか。

友田氏を見送るにあたっては、昔からの研究仲間や縁のあった方々が十数名あつまり、儀式は一切せずに集まった方々がそれぞれに、思い出話や送る言葉を述べてお別れをしました。そして、友田氏のご遺体は火葬にふし、遺言にしたがって遺灰は琵琶湖に撒かれたことを申し添えておきます。